

建築版	施工段階	設備工事： 遮音壁貫通処理	電気	○	設備工事 ポイントシート (6-5)
6-3	下地・ 間仕切		空調	○	
			衛生	○	
			その他	-	

間仕切壁には、部屋の用途により隣室との遮音性能を確保する遮音壁が用いられている場合があります。そのため配管が貫通したり、ボックスを壁の断面の一部に取り付けたりすると、遮音性能が低下します。

ここでは、貫通部の遮音処理について取り上げます。工事は、建築依頼工事や設備配管工事で行われますが建築担当者として、決められた材料、工法で施工されているか、確認する必要があります。

ポイント

■貫通部の処理

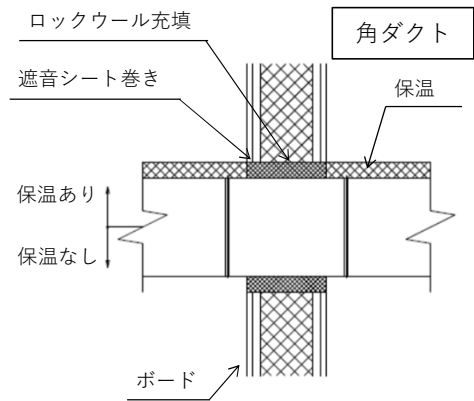
- ・遮音壁の貫通部やコンセントボックスには遮音シートを貼付け四周に隙間を残さないように施工しなければなりません。

■クロストークの防止

- ・ダクトが他の部屋と繋がっている場合には、ダクトルートの再検討や、消音エルボを設置しなければなりません。
- ・隣同士の部屋が左右対称の場合でも、コンセントボックスが表裏重ならないように調整する必要があります。

■遮音性能の確認

- ・室内の騒音許容値と壁の遮音性能を確認するだけでなく、性能を評価する試験要領について建築担当者も入って事前に検討しておくことも重要です。ダクト貫通やボックス取付け後も同様の遮音性能を確保する必要があります。



ダクト貫通処理 例



鉛シート巻き 例

(左：コンセントボックス、右：配管貫通部)

先輩アドバイス

- ・ 工事を始める前に建築担当者も壁の遮音性能と貫通部処理について確認し、遮音性能にあった処理方法を要領書で明確にしてから次の工程に進むことが必要です。
- ・ 貫通部処理は工事終了後には確認することは難しいので、表面仕上げ工事を始める前に各施工段階で全数確認してから次の工程に進むようにしましょう。
- ・ 状況に応じて、設備担当者と協議して音響試験会社などの専門業者に遮音検査を依頼することも必要です。

チェック項目

設備担当者から下記のチェックの結果を確認しましょう。

- 遮音性能に合った貫通部処理が要領書通りに施工されていますか。
- 裏ボックスは、遮音シート巻きの上、遮音壁との四周の隙間はシールで塞がれていますか。
- 配管は、グラスウールなどで絶縁し、貫通部は遮音シート等で巻き上げられていますか。
- クロストーク対策として、遮音壁両側に消音エルボが取り付けられていますか。

失敗すると...

- ・ 遮音性能が悪く、隣室の話し声が漏れてくるおそれがあります。
- ・ 配管やダクトから機器や風などの音が透過してくるおそれがあります。

共通管理項目	合理化 省力化	施工性 向上	品質・ 性能向上	工期短縮 ・圧縮	コスト削減 (材料)	コスト削減 (労務)	設備 先行工事	工事区分 見直し	責任所在 明確化
		-	-	○	-	-	-	-	-
備考	参 考 文 献 :						初版発行	2020年12月	
							改訂		